

増えぬ訪問医 負担大

みとり対応、家族ケアも

在宅医療の

現場から

—あおもりは今—

24時間365日態勢



患者宅を訪問し、診療する竹本照彦所長
=2016年12月12日、八戸市

昨年12月12日午後2時で、本照彦所長(65)が、白衣をろ、八戸市南郷家1丁目に着たまま小走りで車に乗り、ある八戸生協診療所。午前11時、車内で待機していた診察をようやく終えた竹本所長は、看護師と情報を記録する

医療秘書、運転手と共に訪問診療に向かうためだ。一人目の患者は、がん闘病中の八戸市内の女性(86)。家に着くとすぐに診察が始まり、看護師がてきぱきと血圧や体温を測った。先生、薬を頂いたらご飯が食べられるようになりました。ソファに腰掛けながら、にこやかに話す女性の表情は明るい。同居する女性の長女(62)

は、一人暮らしの母親を介護するため、約1年前に市内の自宅から美家へ引っ越ししてきた。長女は「病院へ行くのに車に乗せたり、歩くのを介助したりするのが一番大変。家に来てもらえて助かる」と話す。診察は20分ほどで終了。竹本所長は玄関前で待っていた車に再び乗り込み、次の患者の元へと急いだ。訪問して診察する人数は1日平均10人ほど。診療所への戻りが夜になる日ももある。それでも「患者さんの自宅だと、病院では見られない穏やかな顔や前向きな姿勢が見られる。人間同士の関わりができていくと感じる」とやりがいを感じる。訪問診療の対象は「疾病、傷病のために通院による療養が困難な」ときで、個々の患者が該当する場合は本人や家族と相談した上で、主治医が判断する。国が定める要件を満たす「在宅療養支援診療所」である同診療所には現在、常勤医の竹本所長のほか、非常勤医、研修医の3人の医師が在籍する。脳梗塞の後

「この子を家でみとるのが私の役割、今の生きがいなんです」
昨年夏、重度の障害がある50代の男性を訪問した際、男性の80代の母親が竹本所長に話した。母親は病院や施設ではなく、自宅で息子の世話をするのを選んでいる。
多くの患者にとっては、自宅が最も安心できる場所だ。だが、たとえ医療や看護などのサービスを利用していても、介護をする家族の負担は軽くない。そうした家族を支えるために、訪問診療をする医師は、患者本人と同時に家族の心身の状態を気遣わなければならないケースもある。
竹本所長は「患者さんや家族が在宅を希望した場合、それを支える医療や介護の態勢をつくるのが大切。そのためにも、少しずついいから往診をする医師が増え、在宅医療の輪が広がってほしい」と訴える。

在宅医療を担う医師にはみとりや24時間の対応が必要で、業務がハードという理由から取り組む医師はなかなか増えない。八戸地域でも少数の医師に大きな負担がのしかかっており、患者や家族が在宅での療養を望んでも、受け皿不足から希望通りにならない現状がある。

だ。だが、たとえ医療や看護などのサービスを利用していても、介護をする家族の負担は軽くない。そうした家族を支えるために、訪問診療をする医師は、患者本人と同時に家族の心身の状態を気遣わなければならないケースもある。
竹本所長は「患者さんや家族が在宅を希望した場合、それを支える医療や介護の態勢をつくるのが大切。そのためにも、少しずついいから往診をする医師が増え、在宅医療の輪が広がってほしい」と訴える。

循環器内科・心血管外科
はちのへハートセンター
クリニック
院長 菊池 文孝 (循環器内科)
副院長 盛合 美光 (循環器内科)
非常勤 高橋 賢二 (心血管外科)
【診療受付時間】 午前11時15分～午後11時30分
【休診日】 日曜日、祝日、年末年始(12/30～1/3)
八戸市田向字間ノ田65-1 ☎0178(43)4180
ホームページ <http://www.hachinohe-heart.com/>

入院や外来ではなく、患者の自宅で医療を提供する「在宅医療」。高齢化の進展に加えて患者らのニーズも多様化し、その必要性は高まっている。青森県内の現状や課題を追った。
※あすから第2社会面に掲載します (渡部優)